



情報通

2023 . September 9月号

発行：東京税理士会
情報システム部
題字：神津 信一 (四谷)
(税理士会員章の日輪と八重桜をイメージしています。)

インボイス制度の電子的対応に向けて「日本版コアインボイス」についてもう一度考える ～噛み砕いて言うと…～

東海税理士会 情報システム委員会 井原 英貴

8月号の日本版コアインボイスの記事は、事業者間で受け渡しされる請求書データや会計データをベンダーの壁を超えて扱えないか、というかねてからの問題にデータの標準化の視点で答えを示したものでしたが、やや難解だとの声もあり、この度、落語の「青菜」をヒントに東海税理士会の井原英貴氏が噛み砕いて解説していただきました。こちらでもう一度「日本版コアインボイス」についての理解を整理してみてください。

大旦那「植木屋さん、御酒をお上がりか」

植木屋「へえ、大旦那さま。恐れ入ります。酒は大の好物で」

大旦那「一日、暑い中の仕事で、ご苦労さまでした。関西の友人から、柳蔭を送ってきましてな。井戸水に浸しておいたから、よく冷えておる」

植木屋「ありがとうございます。頂戴します」

大旦那「ところで植木屋さん。あなたのところでは、消費税インボイスはどうしてなさる？」

植木屋「あー、あれは頭の痛いこって、あちこちから問い合わせが来やす。同業者の間でも困っているものが多いようです」

大旦那「うちの倅も税理士さんと相談して、いろいろと準備をしておるようだ」

植木屋「若旦那もご苦労なさっているんですねえ。これだけの本店になると、大変でやしょう」

大旦那「そこでデジタルインボイスを使って、合理化できないかと、考えているようなのだよ」

植木屋「デジタルインボイス？」

大旦那「デジタル庁が推進している、消費税インボイスの電子版だそう。紙ではなくて、パソコンでインボイスをやりとりできる」

植木屋「なるほど、それを使って手間を減らそうってお考えなんですね」

大旦那「そうなのだよ。電子データの形でインボイスを受け取れば、それを会計ソフトに流し込んで、経理も自動化できるというのが、デジタル庁の考えなのだ」

植木屋「結構なことじゃござんせんか、大旦那さま」

大旦那「いや、それがな。結構ずくめというわけには行かないようなのじゃ」

植木屋「それは、どういうこって？」

大旦那「デジタル庁が推奨している日本版のペポル、正式にはJP PINTという規格は、誰でも気軽に使えるものではないらしいのだ」

植木屋「じゃーびー・ぴんと？ピンときませんが」

大旦那「洒落ちゃいけない。いまどきは、どの企業でもパソコン用のソフトを使って請求書を発行しておるが、みな、それぞれに使っているソフトが違う。うちは、如月勘定大納言というソフトを使っておるが、得意先では会計大魔王というソフトを使っている、というぐあいさ」

植木屋「いろいろあるんですねえ」

大旦那「だが、電子でインボイスのやりとりをしたいと思えば、お上に言わせりゃJP PINTという規格でデータを送信しなければならない約束になっておる」

植木屋「お約束ごとなんですね」

大旦那「ところで、インボイスのやりとりを仲介してくれる会社を、プロバイダと言うが、プロバイダが如月勘定大納言やら会計大魔王やら、商人魂やら、ありとあらゆるメーカーのデータ形式にそれぞれ対応して、JP PINTに変換する仕掛けを用意してくれればよいが」

植木屋「そうでないときには？」

大旦那「そうでないときには、デジタル庁推薦のデジタルインボイスは、使えないことになる」

植木屋「あー、よくある、『申し訳ございません。サービス圏外です』ってやつですか」

大旦那「そういうことじゃな」

植木屋「つまりJP PINTは万能薬じゃない、ってこってすか」

大旦那「さらに、インボイスによく似たもので、EDIというものがある。企業同士で、取引の文書を電子化してやりとりする仕組みじゃ。デジタルインボイスよりもはるか以前から、こういうものが、業界ごとに存在して、すでに定着しておるのだよ」

植木屋「すると大手さんは、EDIとは別に、消費税のデジタルインボイスも、これから発行して、やりとりしなきゃならないんですね。そいつあ厄介だ」

大旦那「そこで、今使っているEDIのデータから、デジタルインボイスに必要

な情報を拾い上げて、消費税用のデジタルインボイスに変換するのが合理的だ。そのための仕組みとして、一部の団体が開発を進めているのが、『日本版コアインボイス』という標準規格なのだ」

植木屋「へえ～。話がややこしくなってきたね」

大旦那「たしかに、これまで業界ごとに存在したEDIの標準規格や、消費税のJP PINTに加えて、それらをつなぐ標準の標準、すなわちインタースタANDARDを作ろうというのが、『日本版コアインボイス』の構想であるらしい」

植木屋「実際のところ、どんなふうに使っているんですか？」

大旦那「エスペラント語じゃな」

植木屋「エスペラント語？なんですか、それ」

大旦那「世界共通言語として作られた、人工言語じゃよ。国際会議などで、通訳用に使われることを想定して作られたのだ。これがあれば、各国の通訳はエスペラント語だけマスターしていれば、どんな国の人とも話が通ずる」



植木屋「その会計版が、『日本版コアインボイス』ってわけなんですね」

大旦那「そう。業界別標準EDIには、さまざまなものがある。それらは、別な業界のEDIとは互換性がない。つまり、話が通じない。そこで、いったん共通言語である『日本版コアインボイス』に変換して、それを受け取った側で、自分たちのEDI形式に再変換するのじゃ。おわかりかな」

植木屋「う～ん、わかったような、わからないような……」

大旦那「そうか。植木屋さんは鉄オタ（鉄道おたく）じゃったな」

植木屋「へい。乗り鉄に撮り鉄で」

大旦那「結構なことだ。では鉄道にたとえると、こうなる」

植木屋「よろしくお願ひしやす」

大旦那「各種業界別の標準EDIは、いってみれば、ゲージ幅の異なる鉄道路線のようなものじゃ。私鉄ごとに微妙にゲージ幅が違ったら、同じ駅で荷物の受渡しができないじゃろう」

植木屋「そういう場合には、乗り合い駅があるんじゃないですか？」

大旦那「その通り。その乗り合い駅に相当するのが、セマンティック・ゲートウェイとよばれる、日本版コアインボイスの仕掛けなのじゃ」

植木屋「高輪ゲートウェイ駅みたいなもんですか？」

大旦那「イメージとしては、そんなものかな。そこで列車で運ばれるこまごました荷物だが、これをインボイスとして必要なデータ項目だと考える」

植木屋「データを列車（業界）間でやりとりするには、積み荷をひょいと載せ替える仕掛けが、必要ですね」

大旦那「列車で言うところ、コンテナのようなものだな」

植木屋「コンテナは、20世紀最大の輸送革命といわれていますね。トラックでも、列車でも、船でも、自在に荷物を載せ替えて、世界中に届けられますからね。コンテナも規格が標準化されていますから、別な乗り物に乗せ替えても、不都合なく運べるんです」

大旦那「さすがに詳しいのう。EDIと消費税インボイスとのデータ連携ということ考えると、インボイスに必要な項目を、EDIから選別するリストが必要だ。それが『日本版コアインボイス』の役割なのじゃよ。荷物を選別する、ピッキングリストのようなものじゃな」

植木屋「なるほど。コンテナがどこにでも荷物を正確に届けられるように、日本版コアインボイスの仕掛けを使えば、誰でも便利にデジタルインボイスが使えるわけですね」

大旦那「その積替作業を、構文パインディングという」

植木屋「わぁ、また難しい言葉が出てきた！大旦那さま、もうご勘弁ください」

大旦那「はははは。ところで植木屋さん、菜をお上がりか」

植木屋「申し訳ございません。子供の頃から、野菜はアレルギーがありまして」

大旦那「何だ。残念。次の台詞が出なくなってしまったわ」

植木屋「何ですか、それ？」

大旦那「鞍馬の山から出まして、その名も九郎判官……」

おあとが、よろしいようで。

